二期作による馬鈴薯の採種技術*

戸 刈 義 次

(農 林 省 農 事 試 験 場)

The breeding technique of seed by two terms potato-cultivations. Y. Togari

種薯の具備すべき条件は無病特にバイラス病に罹っていない事と、播種に當り休眠終了後適当な日數を経た状態にあることで、要するに病理・生理の2条件が共に満足されなければならない。寒地、高冷地は自ら之等の條件を満たす環境であるが、暖地の種薯生産は二期作により所謂秋薯採種に依らなければならない。ここに二期作による採種技術が問題となるから、之に関連して行つた試験成績の概要を報告する。

秋栽培に於ては第一期作の收穫期の早い程、第1表の様にバイラス病發現が少い。第二期作收穫の時、バイラス株を淘汰してもバイラス罹病株の多い場合は淘汰が充分實施出来ないものと見え、翌春の栽培に於ても矢張りバイラス病發現が多いこと第2表の如くである。但し第一期作收穫期が早すぎると第3表の様に催芽が幾分困難となるから、この場合は催芽個體數を増加するか、又は特殊の催芽方法を探ることが必要である。

この様に6月を過ぎてから收穫をする秋栽培に於て急激にバイラス發病を増し、且つ催芽も困難となるから、秋種採種の場合の第一期作收穫期は7月に入つてはならない。而も6月10日收穫量は7月10日の4~7割に達するから、第一期作の生産量としても著しい不利はない。

尙秋種使用の場合にバイラス發病の少いのは罹病が少いと共に種薯の生理的條件のために發病を抑制することが第4表から考えられる。

本試験では秋種はバイラス發現は少いにもかかわらず、その収量は成績として示さなかつたが案外少なかつた。之は秋種は一般に晩生の傾向を有するので、收穫期が普通では早すぎるここにもよるが、更に第4表の如く秋種は萌芽が遅いことにも大きな原因がある。従つて秋種に關する収量成績並に實際栽培は是非共、催芽を伴つて行われなければならない。

第 1 表 第1期作の收穫期と
第2期作のバイラス株%

第1期作收穫期	第2期作の バイラス株%
6月 10日	4
6 20	24
6 30	28
7 10	65

第 2 表 第1期作收穫期を異にして
生産した秋薯の性能

第1期作收穫期	翌春作の バイラス株%
6月 10日	6
6 20	10
6 30	14
7 10	26

* 昭和22年12月6日 第77回講演會に於て發表
日本作物學會紀事 第17卷 第4號

第 3 表 第 1 期作收穫期と秋栽培種薯の催芽難易

第 1 期作 收 穫 期	置床中の 腐敗 %	發 芽 %			發 芽 及 發 根 %							
		8.24	29	9.3	8.24	29	9.3	8	13	18	23	28
6月 10日	0	42	96	100	2	76	86	86	90	94	98	100
6 20	4	83	100		6	81	85	85	88	96	100	
6 30	6	100			28	91	98	100				
7 10	18	49	90	100	2	66	88	98	98	98	100	

第 4 表 種々の種薯のバイラス病發現程度

種 薯 の 種 類	萌 芽 期	バイラス株%
標 準 (1 年目)	4 月 27日	2
春 種 (2 年目)	4 24	100
春 種 (3 年目)	4 26	100
秋 種 (淘 汰)	5 12	4
秋 種 (無淘汰)	5 11	30